釣りミステリーベスト集成

山村正夫 編

西村京太郎
皆川博子
森村誠一
幾瀬勝彬
西村寿行
島田一男
西尾正
山村正夫
西東登
香山滋
久生十蘭

釣りミステリー

山村正夫 編

TOKUMA NOVELS

TOKUMA NOVELS

発行者　徳間康快
発行所　徳間書店
東京都港区新橋四ノ一〇　郵便番号一〇五
電話四三三・六二三一　振替東京四―四四三九二

山村正夫編
釣りミステリーベスト集成

カバー　写真／諸里清士　デザイン／矢島高光
©1978
落丁・乱丁はおとりかえいたします

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertong

釣りミステリーベスト集成

山村正夫 編

TOKUMA NOVELS

釣りミステリーベスト集成——目次

幻の魚――西村京太郎――9
海の耀き――皆川博子――27
溯死(そし)水系――森村誠一――53
幻の魚殺人事件――幾瀬勝彬――77
海の修羅王――西村寿行――109
海猫は語らない――島田一男――147

海蛇――西尾正――175
指――山村正夫――189
名人死す――西東登――209
怪魚シーラカンス――香山滋――229
鎌いたち――久生十蘭――253
解説――山村正夫――269

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertong

幻の魚——西村京太郎

にしむら・きょうたろう

昭和五年九月六日、栃木県に生れた。都立電機工業卒業後、公務員、トラック運転手、保険外交員、私立探偵、警備員など数々の職を転々としたが、昭和三十八年「歪んだ朝」により第二回オール読物推理小説新人賞を受賞。さらに昭和四十年には「天使の傷痕」により第十一回江戸川乱歩賞を受賞した。また昭和四十二年には、総理府の募集した「二十一世紀の日本」の課題作に「太陽と砂」が入賞するなど、本格物、サスペンス、スパイ物、パロディー、海洋物と、その作風は多岐にわたり、推理文壇きっての技巧派作家として、エネルギッシュな活躍ぶりを示している。

1

イシダイが、幻の魚と呼ばれるようになってしまったのは、いったい、何時頃からなのだろうか。

少なくとも、田島が、釣りに凝り出した頃には、イシダイは、めったに釣れない貴重な魚になってしまっていた。乗り合いの釣舟なんかで、老人と隣り合せになると、伊豆あたりで、イシダイが、いれぐいだったことがあるなどと話してくれるのだが、田島にとっては、まさに、夢物語である。

雑誌の挿し絵の仕事をしているので、比較的、時間の余裕があり、西伊豆の波勝崎などへ車で出かけるのだが、目当のイシダイは、なかなか釣れず、外道のウツボばかりが針にかかってくる。イシダイ釣りは、一日一尺（約三〇センチ）といわれ、一日釣って、一匹釣れればいいとしなければならないのだが、釣り人というのは、我慢ということが、なかなか出来ないもので、どこそこの磯で、イシダイの大物が釣れたというと、その情報が不確かなものであっても、竿をかついで、飛び出して行くのである。

六月上旬のその日も、伊豆七島の式根島で、六、七キロの大物が出たという情報を耳にして、田島は、出かけることにした。

式根島は、イシダイ釣りのエサであるサザエがないので、東京で用意していかなければならないのが、ちょっと不便だが、地形が複雑で、釣りにふさわしい磯が多い島である。

田島は、愛用の竿をかつぎ、六月七日の夜、竹芝桟橋から大島行の船に乗った。式根へは、大島で乗りかえである。

梅雨の盛りで、この日も、朝から、じとじとと、細かい雨が降り続いていたが、そのおかげで、船客は、まばらだった。田島としては、この方が有難かった。梅雨が明ければ、伊豆七島行の船は、若者たちで満員になってしまい、落着いて、磯釣りができる状態ではなくなるからである。

田島は、一等船室の窓際に腰をかけた。映画館みたいに、ずらりと並んだ座席に、ほとんど人の姿がない。が、それでも、出航間際になると、釣り支度の男が二

人、どやどやッと船室に入って来て、ひとかたまりに腰を下した。いずれも三十歳前後の男たちで、アイスボックスまで下げた完全武装である。
（彼等も、あの情報に小踊りして、式根島へ出かけるのだろうか？）
と、田島は考えた。式根で、一緒に釣りを楽しみたいという気がする一方では、人数が少ない方が、イシダイを釣るチャンスが増えるのだがと、思ったりもした。釣り好きに悪人はいないというが、エゴイストは、ごまんといる。
翌朝の午前五時。夜明けに、船は、大島の岡田港に着いた。同じ桟橋の反対側から、利島、式根島、神津島などへ行く船が出る。大島までは、二千トンの大型船だが、ここからの船は、六百トンと小さくなる。当然、揺れ方はひどくなる。そのためか、小さな船室に入ると、洗面器が、積み重ねてあった。
例の二人組は、田島の予想どおり、彼と一緒に、式根島でおりた。向うが、じろじろと田島を見ながら、船をおりて行ったのは、多分、イシダイ釣りのライバルとでも思ったからに違いない。
田島たち三人の他には、式根でおりた客はいなかった。野伏港という小さな入江に、コンクリートの岸壁が伸びていて、そこが港である。設備が悪いので、艀（はしけ）を使っての上陸だった。
雲が切れて、陽が射してきた。
面積三・八平方キロ、人口約千人の小さな島である。夏には、民宿ができるが、今は、島に五軒ある旅館のどれかに、泊るより仕方がない。
田島は、岸壁のところで、わざと一服して、二人の姿が見えなくなるのを待ってから歩き出し、島の南側にある足付旅館に向って、歩いて行った。この旅館の近くの磯で、例の大物が釣れたということだったからである。
島の北端の野伏港から、南の足付旅館まで歩いて三十分の距離で、そのくらいの広さの島だということでもある。
二階建の可愛らしい旅館だった。収容人員は、十五、六人といったところだろうか。迎えに出て来た中年の主人夫婦にきくと、泊り客は、若い東京の女性一人だけだという。あの二人は、他の旅館に入ったらしい。

「女一人で、今頃、何しに来たんだろうね？」
と、田島は、部屋に案内して貰いながら、宿の主人にきいてみた。真っ黒に陽焼けした顔は、宿の主人というより、漁師という方がふさわしい。
「釣りに来たといってましたよ」
宿の主人は、ニコニコ笑いながらいった。
「若い女の釣師というのは、珍しいねえ」
「昨日、おみえになったんですがね。今日も、磯竿を持って、お出かけになりました。朝早くから。お弁当を作って、差しあげたんですが、イシダイが、釣れるといいんですがねえ」
「イシダイを釣りに来たのかい？」
「そうおっしゃってましたがねえ」
相変らず、ニコニコ笑いながら、宿の主人がいった。
最近は、女性の釣師も多くなったが、たいていが、キスとか、海タナゴ、或はハゼといった小物釣りが多い。たった一人で、イシダイを釣りに来ているというのは珍しい。引きの強い魚だから、体力にも自信があるのだろう。
田島は、部屋で一休みしてから、旅館を出た。
リアス式の海岸なので、この島は、到るところが、好釣り場である。田島は、まず、旅館に近い大崎へ歩いて行き、突端に腰を下した。風が少し強いが、釣りには絶好の日よりだった。
黒潮が近くを流れているので、海面が泡立っている。イシダイは、潮流の早い岩礁地帯に住みつく魚だから、釣れる可能性がある。田島は、ポイントを決めると、コマセに使うサザエを、ハンマーで砕いた。撒き餌である。
コマセをしてから、餌をつけて、竿を投げ入れた。あとは、じっと待つだけだった。海面が光るので、サングラスをかけ、岩に腰を下して、周囲を見廻した。
船で一緒だった二人の姿は見当らなかった。他の場所で、釣っているのだろう。宿の主人がいった、東京の若い女というのも、姿が見えない。
（美人かな）
などと、あらぬことを考えたりしたせいか、いっこうに、食いがない。仕掛けを、途中で変えてみたが、それでも駄目だった。陽が落ちて来たので、明日を期することにして、田島は、旅館に戻った。

夕食を運んでくれたおカミさんが、
「東京の女の方も、釣れなかったそうですよ」
と、なぐさめるようにいった。
「名前は、何というの？　その女性は」
「小山有子さんと、宿帳に、お書きになっていましたよ。お食事をすませてから、温泉へ行くといって、お出かけになりましたけど」

2

田島も、温泉へ出かけることにした。
式根島には、二つの温泉がある。足付、地鉈の二つで、どちらも、海の中に、約七〇度の温泉がわき出している。もちろん、露天風呂で、潮の干満によって、温度が変ってくる面白い温泉でもある。
田島は、地鉈温泉まで歩いて行った。名前どおり、地面をナタで割ったような、深い谷底にある温泉だった。
月が出たので、ぼんやりと明るい。田島は、急な坂道を、海に向って降りて行った。コンクリートで階段を作ってあるといっても、真下に落ちて行くような急な階段で、月が出ていなければ、怖くて、おりられないだろう。
小山有子という若い女の姿はなかった。足付温泉の方は、途中でのぞいてみたのだが、誰の姿もなかった。
（ちょっと残念だな）
と、思いながら、田島は、裸になり、湯壺に身体を入れた。打ち寄せる波が、湯壺の中へ、ざあッと音を立てて浸入してくる。普通の温泉では味わえない、豪快な気分だった。
遠く水平線を眺めながら、田島は、いい気持で湯につかっていたが、ふと、人の気配がしたので、振り返った。その眼に、青い月の光を浴びた若い女の裸身が、いきなり飛び込んで来た。
腰に、宿の手拭を巻きつけただけの恰好で、女は、じゃぶじゃぶと、田島に近づいて来た。その顔が、月の光の中で笑っている。
田島も、微笑して、「やあ」と、声をかけた。
「小山有子さん？」
「――――」

女は、黙って、こっくりしてから、そこで、湯壺に身体を沈めると思ったのに、田島のいるところまで、寄って来ると、いきなり、彼に抱きついてきた。
豊かな肉付きの、ずっしりした手応えに、田島は、思わずよろめいて、危うく、湯の中に沈みかけた。
「抱いて」
と、女が、田島の耳元でささやいた。
何が何やらわからないながら、二十八歳の若い田島の身体は、自然に、女の肉体を受け止め、両腕は、彼女を抱きしめていた。
女の腰を蔽っていた手拭は、いつの間にか流れ去ってしまっている。
女の方から、唇を求めてきた。お湯の中で、女を抱くのは、奇妙な感じのものだ。特に、青白い月の光の中でではである。
女は、じっと眼を閉じて、田島にしがみついている。田島は、これが据え膳というやつかなと、ニヤつきながら、片手で、乳房をさすり、少しずつ、下腹部の方へずらしていった。
海水に濡れた毛の部分をまさぐろうとすると、女は、一瞬腰を引いたが、田島の指が、執拗に追いかけると、あきらめたように、少しずつ、湯壺の中で足を開いていった。
田島が、女の熱い部分に、指を押し当て、そっと力を籠めて沈めていくと、彼女は、「あッ」と、小さな声をあげた。田島の首に巻きつけていた女の腕に力が入り、引いていた腰を、前に、ぐいぐい押しつけてきた。
田島は、湯壺の底に両膝をつき、胸の辺りまで湯に浸って女を抱いていたのだが、身体が不安定なので、少しずつ、浅い方へ身体をずらせて行った。浅瀬に来ると、田島は、湯壺の底に、どっかりと腰を下し、女の足を開かせたまま、自分の膝の上に、またがらせた。
女は、田島のなすがままになっている。指の腹で、女の敏感な部分を、愛撫しながら、
「いいんだね？」
と、彼女の耳元できいた。
女は、眼を閉じたまま、「え？」と、ぼんやりした声で、きき返してくる。それを、陶酔の表情と受け取って、田島は、インサートさせ、彼女の肉付きのいい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong